



を宿す母体といふこともお構いなし
的にペニスを出し入れする。
という名の排泄行為をするために。

エイリアンえっち —異星人が産まれた日—

巨大なを握
みつのうなト
てきている。

もみゃ

トロ

むわ

大化した
の感触
つ

部分でX-100の

た液体を手で掬い
れをローション替
えた。

ず
ず

ストーリーCG集

完全生物「X-00」の孵化予想時刻まであと数時間といったところで、緊急アラートが研究所に鳴り響いた。

「なにがあった？」

私はまだ半分開いてない目をこすりながら、管理システムAIに尋ねた。

「研究所内でヒトの死亡が確認されました。死亡者はフェルナンド研究員、シヨウ研究員の2名です。」

「なんだって！」

一瞬、AIが何を言っているのかわからなかった。だが2人は今、完全生物孵化所で経過観察記録をしていたはずだ。

段々と思考がまとまってきた。

私は危険と思いながらも、急いで孵化所に駆けた。

X-00は仮想世界での実験でも凶暴化することが何度かあった。そのため産まれてすぐに制御コードを脊髓に導入する手筈だったが、おそらくは孵化のタイミングが何らかの理由でズレてしまったせいで導入が間に合わず、このようなことになってしまったのだ。

声紋認証でロックを解除し扉を開くと、目を疑うような光景が広がっていた。血で真っ赤に染まった床の上に、不気味な化け物が佇んでいたのだ。



私はすぐに悟った。こいつは産まれてすぐに2人の肉体を捕食し自らの肉体周波数を安定させたのだ。

そして身体が完成した以上、こいつが行うことはひとつしかなかった。

急いで踵を返し、扉を開こうとしたところで後頭部に重い衝撃が走った。

気づくと私は大の字に寝転がっていた。
ハツとして動こうとしたが、とてつもない
激痛が走る。

「うわぁー!!!」

両腕と両脚がちぎられていた。

「クソっ！どうしてこんなことを！」

そう独り言をいうが、理由は分かっていた。
何せこの生き物をデザインしたのは他でもない私だからだ。

研究所内は元素変換ガスと自動細胞治療システムが機能している。つまり、このまま動けなくても生命活動に必要な養分は空気中から摂取できるし、自動的に傷も治っていく。

だが、研究所の空調システムのみだと両腕と両足が完全に修復し終わるまで、数か月はかかる。

「クソが。これなら死んだほうがマシだ。」
私は一瞬、死んだ2人の研究員が羨ましいと思った。

これから訪れるであろう地獄の日々を想像したからだ。

助けが来るのを待つのは現実的ではなかった。完全生物研究は政府の最高機密であり、この星の存在自体上層部の者しか知らず連絡はこちらから数か月に一度研究の経過報告をするのみであった。

「キィー、キィー」

すぐそばでX-00の鳴き声が聞こえた。



むわ

むわ

慌てて音がした方向を見ると、黒く輝く外骨格をむき出しにし、デリケートな器官が密集する胴体部周辺だけは軟質な表皮に覆われた無骨な外見の生物がそこに立っていた。

「おい、やめろ。俺は人としての尊厳を失
いたくない！」

い、い、い

言葉は当然通じない、X-00は産まれたばかりであり何も学習しておらず、本能としてプログラムされている肉体の維持と生殖以外の行動は一切取らない。



X-00はお尻をこちらに向け四つん這いになり、私のペニスを観察している。生殖器であることは気づいているだろうが、これから自身の肉体に適合するかチェックを行うはずだ。

ズズズ...

カバ
ば

ゆっくりと口が開き、内部にある筒状の舌を押し出す不気味な音が聞こえる。

まだ膨張しきっていないペニスを吸いとり、
舌の中に収められた。

ぷりん

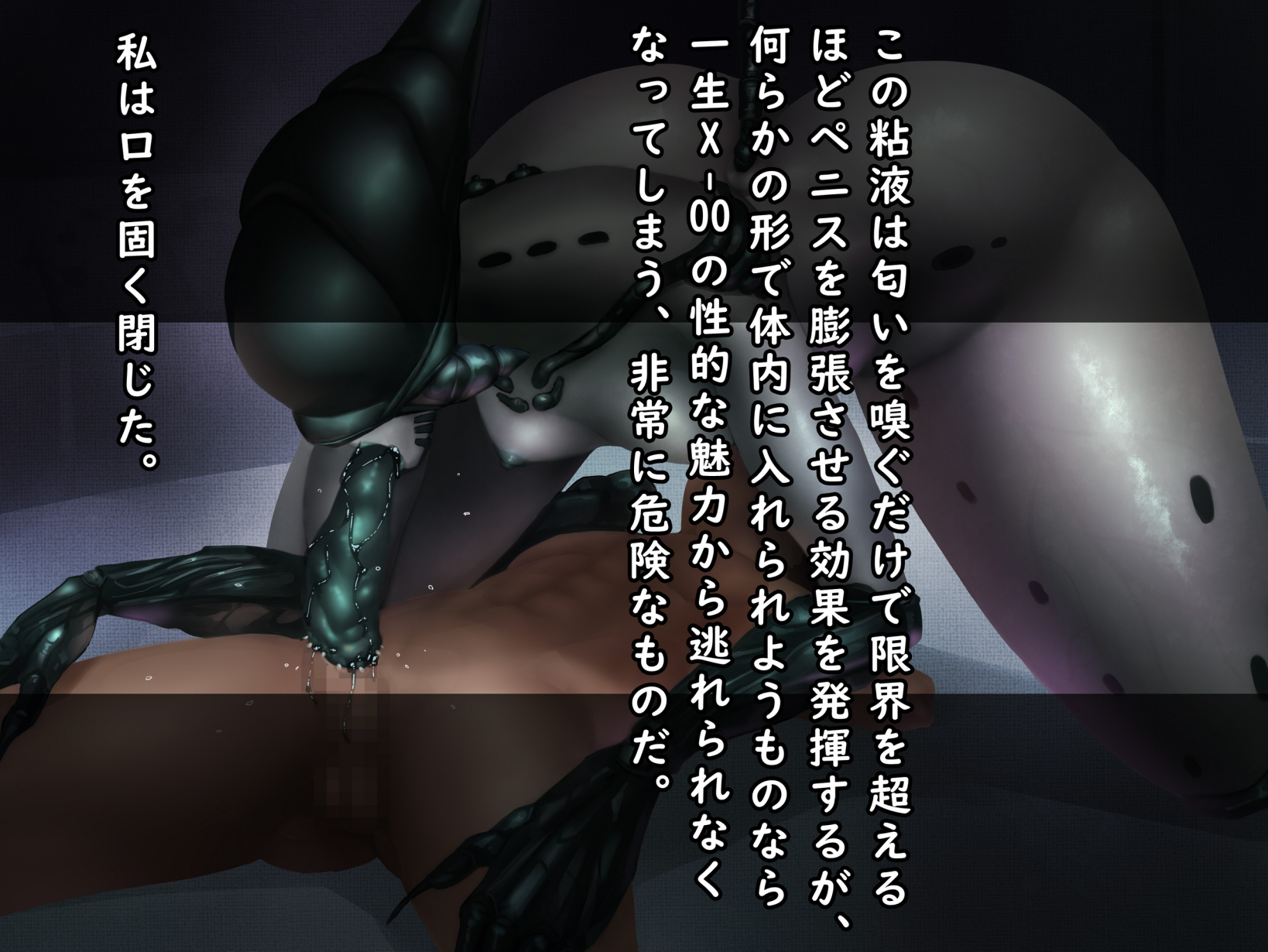
「うわあ！」

むち

にゅるんっ

そして異種間との生殖を実現するための画
期的な仕組み「媚薬入り粘液」を膣口と口
内から垂らし、すぐにビンビンにさせられ
た。





この粘液は匂いを嗅ぐだけで限界を超える
ほどペニスを膨張させる効果を発揮するが、
何らかの形で体内に入れられようものなら
一生X-00の性的な魅力から逃れられなく
なってしまう、非常に危険なものだ。

私は口を固く閉じた。

舌内が蠕動運動を始めて、ペニスを奥へと引きずり込もうとしてくる。舌内には無数のつぶがあり、そのせいで腰が震えるほどの快感を与えられる。

ずる

「んぐー!!」



「ンンンー！」

私は垂れてくる膣液が口に入らないように、
必死に口を閉じていたがその努力を全て無
に返される事を悟った。

X-00の尻がゆっくり顔に近づいてきた。
(クソ！マズい！ これは、どうすれば)

ふびにゅ...

ふびゅ

みっちりとした尻肉で顔全体を覆われ、
膣口を口に押し付けられる形になった。
膣液を飲んでしまわないように、工夫して
呼吸をする。

その時、舌の搾精運動が次の段階に移行した。
舌内でペニスを吸引し密着させ、蠕動運動でコリコリとしたイボで刺激するだけだったのが、ペニスをさながら便のように舌内からひり出し、そして吸い付くという運動まで加わったのだ。



私はやり場のない堪え難いほどの快感を歯を強く食いしばることで必死に耐えようとした。

ふるん

X-00は尻を動かし始め、膣を私の鼻や口になすりつけるような行為を始めた。

ズリ

私は目を閉じているので見ることは出来な
いが、触れる感触から、陰唇がビクビクと
激しく震えているようだ。
私の顔に股を擦り付けることでX-00は快
感を得ている。なんという屈辱だろうか。



ぐちょ
ぬちょ

そして分泌される膣液の量が異常に多くなってきた。これはもう口の中に粘液が入ってしまうのも時間の問題のように思えた。

もち

どろ

すこしコリっとしたものが鼻先に触れるたびに、膣口がぐっと閉じ、再び開くと膣液が溢れてくるような状態のようだ。このコリっとしたものは多分膨張した陰核だろう。

ずぶぶぶ

X-00の舌は、恐ろしいほどの速度でペニ
スを出し入れしている。舌内から大量に分
泌され続ける粘液がなければ、吸い付くと
きのバキューム力で食いちぎられそうな勢
いだ。

私はこれまで、冷静に状況を分析し整理す
ることによって脳を活発に働かせ、快楽から逃れ
ようと抵抗していたが、雄として生まれた
以上ペニスの感覚にだけは逆らうことは出
来ない。

ずちゅ

ずちゅ

ずちゅ

ずちゅ



(くそー!!!)

固く閉じた瞼の隙間から、涙がこぼれ落ちた。

ーぼ

ドッ
ドッ

射精後、尿道に残っている最後の一滴までX-00の舌は丹念に吸い付くし、ようやくペニスを解放した。



そして、膣液を垂らしながらゆっくりと立ち上がり私の方を向いた。

そうだ。ここからなんだ。

X-00の媚薬入り粘液のせいで、未だにペニスはガチガチに勃起している。

アッ〜

とろ

